地域のみな様と、私たちをむすぶ広報誌

公立南丹病院

Nantan General Hospital

Vol.33
2017.4
Spring
春号

平成28年度 公立南丹看護学校卒業証書授与式･謝恩会（平成29年3月3日）

緊張して入学式を迎えた日が昨日のようにも、遠い昔のようにも感じながら卒業の日を迎えました。３年間を振り返ると、自分との戦いの連続で、多くの人との出会いが自分の成長に繋がっていたのだと感じます。学びの機会を作ってくださった患者さん、病棟指導者・スタッフの方々、先生方、そして家族。多くの人に支えられてこの日を迎えられたことに感謝の気持ちでいっぱいです。現時点は一つの通過点にすぎません。この感謝や初心を忘れることなく、今まで以上に努力を積み重ね、立派な看護師を目指していきたいと思います。

卒業生 松岡（まつおか） 七海（ななみ）

臨床研修指定病院　地域がん診療病院　救急告示病院
日本医療機能評価機構認定病院　へき地医療拠点病院
第二種感染症指定医療機関　地域周産期母子医療センター
京都府地域リハビリテーション支援センター　エイズ拠点病院
京都府難病医療協力病院　地域災害医療センター
DMAT指定医療機関　認知症疾患医療センター

公立南丹病院
〒629-0197 京都府南丹市八木町八木上野 25 番地
TEL 0771-42-2510 ㈹　FAX 0771-42-2096
http://www.nantanhosp.or.jp

公立南丹病院広報誌

病院の理念

公立南丹病院は、この地域の住民の生命健康を守る最終拠点病院である。このことを病院職員は深く認識し、患者さんの権利を守り、患者さん中心の医療を行い、患者さんから愛され信頼される病院をめざす。

患者さんの権利と責務

私たちは患者さんの権利を尊重し、十分な説明と合意に基づいた医療を行います。

1. 説明を受ける権利
2. 治療を選択する権利
3. 情報を知る権利
4. 個人匿報の保護を受ける権利
5. 自分の健康情報を正確に提供する責務
6. 説明を理解するまで問う責務
7. 病院での規則に従う責務

2017.4
Vol.33
春号

CONTENTS

■「京都中部総合医療センター」にかける思い …… ①
■病院名変更にかける思い …… ②
■赴任医師のご挨拶 …… ③
■第１回 南丹カップを開催して …… ⑤
■「第１回南丹カップ」に参加して …… ⑤
■第１回南丹カップに患者役ボランティアとして参加して …… ⑥
■診療科紹介ー病理診断科 …… ⑦
■MRI装置の新規導入とリニューアル … ⑧
■近隣の連携医療機関の先生方 …… ⑨
　平岡医院
　河野歯科医院
■看護師として１年を終えて …… ⑩
■平成２８年度「第３回 緩和ケア講演会」 …… ⑩
■看護師・助産師募集
■南丹病院「門柱」物語
■南丹地域の災害医療体制の強化
■編集後記

「京都中部総合医療センター」にかける思い

院長　辰巳（たつみ） 哲也（てつや）

今年は新年早々大変雪が多く厳しい冬でしたが、2月にはさわやかな梅の香が漂い、桜が美しく咲き誇るのどかな春がまた訪れました。皆様におかれましては、健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。京都には桜の名所が多数あり、円山公園や平安神宮神苑に代表される美しい枝垂桜や、東寺、清水寺、醍醐寺、天龍寺など世界遺産に指定されている名刹とともに楽しめる豪華絢爛な桜、賀茂川や哲学の道を散策しながら、爽やかな春風とともに楽しめる桜など、様々な楽しみ方があるかと思います。今年もまた穏やかな春のひと時を家族や友人とともに過ごしたいと思っています。

平成19年に公立南丹病院に赴任して10年の歳月が過ぎ、平成29年の新しい年度が始まろうとしています。身が引き締まる思いで1年間の目標に向かって頑張りたいと思います。日本は世界に類をみない速さで少子超高齢化社会を迎え、医療・介護・福祉などの社会保障制度が大きく変わっていく時代となりました。平成26年に病院長を拝命してからは、「地域医療構想」に対応すべく7:1急性期病棟を一部機能再編し、回復期リハビリ病棟、地域包括ケア病棟、訪問看護ステーション開設など病床の機能分化や在宅支援機能の強化を行いながら、医療の質向上と効率化を図る努力を推し進めてきました。日本は米国、スイスに次ぎ世界で3番目に医療費の高い国であると言われています。高齢化率が30%になる2025年に向けて病床の削減や病床機能分化はさらに加速されると思われます。今後も医療圏における拠点病院として、皆様に最善の医療が提供できるように努力を続けていきたいと考えます。

5月より病院名を「京都中部総合医療センター」に変更させていただくことになりました。かねてからの深刻な課題である医師・看護師・助産師などの人材不足を解消し、総合的な機能を表現し、新しい時代へ向けて地域を支える拠点病院としての役割を内外に強く発信したいと思います。最適な医療を地域で提供するためには効率的な機能分担を行える医療連携が必要です。医療圏の病院・診療所の先生方、在宅・介護に携わる医療関係者の方々との「顔の見える関係作り」を推し進め、地域連携・協調をさらに促進させて総合医療センターを中核とした質の高い医療を住民の方々に安心して幅広く提供できるシステム構築を目指していきたいと考えています。また教育、研修に向けて力を入れ、スタッフ皆様が活き活きとやりがいを持って働ける職場づくりに努力していきたいと願っています。

4月からは多くの新しい仲間達を迎えます。新しく御勤務いただける職員の皆様には心からの歓迎と今後の御活躍を期待しています。スタッフが増員される診療科は外科で、消化器外科の標榜も追加されました。また4月より非常勤で新しく乳腺外科の専門医も勤務していただくこととなり乳腺外科の標榜も行いました。これにより多くの女性が不安に思う乳腺疾患に対する診療がますます充実されるものと思われます。さらに伏木総長の御尽力で病理診断科が新設され、病理診断の精度向上・迅速化が促進され、外科治療・化学療法・放射線治療が完備された「地域がん診療病院」として高度な医療を提供できる体制が強化されました。

私の家にはハナミズキの木があり5月には美しい薄紅色の可愛い花が咲きます。清らかな花を見ると、一青窈さんの「ハナミズキ」という大好きな歌が

心に浮かびます。娘の成長と幸せを願いながら毎年見ていた花ですが、新しく社会人になられた職員の皆様やこれまで病院をいっしょに支えて下さった家族同様の職員の皆様との努力がいつか実を結び、果てない夢がともに叶いますことを願い、今年もこの花を見つめたいと思います。皆様の春がさわやかで心温かなものでありますようにお祈りしております。

病院名変更にかける思い

国民健康保険南丹病院組合　副管理者　川野（かわの）　一男（かずお）

公立南丹病院は5月1日から「京都中部総合医療センター」へ名称を変更します。これまでの経過と私たちが新しい病院名にかけた思いについて紹介します。

公立南丹病院においては、厳しい看護師不足が続いており、勤務条件の改善などの努力にもかかわらず、ついに平成24年10月に1病棟を閉鎖せざるを得ない状況に陥りました。その後、各地の就業フェアでの病院の紹介や大学の看護学部、看護専門学校等への募集活動を積極的に展開しましたが、病院の知名度が低く、現場の担当者からは、「京都市内からの通勤圏にある総合病院ということが理解されにくい。」「就業フェアではブースに寄ってきてもらえない。」という意見がありました。

また、近年の医療改革に沿って当院では回復期リハビリテーション病棟や地域包括ケア病棟の開設、訪問看護ステーションの整備など、地域包括ケアシステムを担う地域の拠点病院として、急性期医療の提供から在宅医療支援までを担うべく病院機能の向上に取り組んでいます。こういった人材確保と病院機能向上の取組を進める中で病院名変更の声が上がってきました。

まず各部署から選ばれた職員で検討チームを立ち上げ、病院職員から新名称を募集したところ175件の応募がありました。病院の設置者である国民健康保険南丹病院組合の構成市町である亀岡市、南丹市、京丹波町の各市町長、議会議長、亀岡、船井の医師会代表に病院幹部を加えた選定委員会へ提案数の多かった案を中心に7案を諮りました。審議の中で7案の一つ「京都中部総合医療センター」の賛成意見が相次ぎ、全会一致での選定となりました。

その後、構成2市1町の議会に諮り、各議会の審議を経て、全ての議会で承認され「京都中部総合医療センター」の改称が決定しました。

その過程で「名称も大事だが、診療の内容も新しい名前に恥じない病院にしていくことが重要である」との意見をいただき、身が引き締まる思いでした。

今後、医療を始めとする社会保障制度全体の見直しが進み、地域全体でより効果的、効率的に医療、介護等を提供できる仕組み作りが求められてきます。高齢化、人口減少が急速に進んでいる南丹医療圏で、地域の拠点病院として地域医療を支えるために、医師や看護師等の人材をきちんと確保し、急性期から回復期、地域医療支援のための機能を充実させ、関係者の皆さんと連携し、地域の住民の皆さんや患者さんが必要とする医療を的確に提供していかなければならないと考えています。

今後も新しい病院名にふさわしい病院となるようたゆまない努力を続けていきます。

赴任医師のご挨拶

循環器内科

医員 上野 大輔（平成26年卒）

地域の皆様のお役に立てるよう微力ながら地域の医療に貢献できるよう日々精進して参ります。まだまだ未熟で至らぬ点もあるかとは存じますが、よろしくお願い申し上げます。

医員 坂上 雄（平成27年卒）

1年ぶりにまた公立南丹病院にお世話になります。皆さまと共に歩む、心のこもった医療を目指します。未熟な点も多々ございますが、地域に貢献できるように研鑽いたしますので、ご指導のほどどうかよろしくお願い申し上げます。

腎臓内科

医員 亀﨑 通嗣（平成21年卒）

京都府立医科大学大学院を修了し、本年度より公立南丹病院に赴任することになりました。腎臓内科の一員として南丹医療圏の地域医療に貢献できますよう精一杯頑張りますので、何卒宜しくお願い致します。

医員 森本 真理（平成26年卒）

昨年度までは京都府立医科大学附属病院で働いておりました。少しでも地域の皆様のお役にたてるよう精進して参ります。至らぬ点も多くお世話になることもあるかと思いますが、精一杯頑張ります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

脳神経内科

医員 松浦 啓（平成25年卒）

神経内科医になってからは京都府立医科大学附属病院で神経難病や脳梗塞をはじめとする神経救急疾患を中心に研鑽を積んで参りました。神経内科医としてはまだまだ未熟ではありますが、これまで学んできたことを南丹医療圏の皆様に提供できるよう、またさらに良い医療が提供できるようレベルアップすることを目指して精進していく所存です。至らぬ点もあるかと思いますが、皆様どうかよろしくお願い致します。

外　科

医長 長田 寛之（平成14年卒）

外科医は我々の手が必要となった皆様に、バランスのとれた治療を提供することが使命だと考えております。当院の医師の一員として、精一杯頑張りたいと思いますので、宜しくお願い致します。

医員 神谷 肇（平成27年卒）

1人でも多くの患者さんのお役に立つ事ができるように日々精進し、努力していく所存です。未熟な点が多く、お世話になる事が多々あるかと存じますが何卒よろしくお願い致します。

小児外科

医員 神部 浩輔（平成26年卒）

微力ながら公立南丹病院、地域の皆様のお役に立てるように、日々精進します。至らぬ点が多数あるかと思いますが、よろしくお願いいたします。

整形外科

医員 勝山 祐誠（平成26年卒）

全ての患者さんが笑顔になれるように、丁寧で親切な診療を心がけようと思います。まだまだ未熟者でご迷惑をおかけすることもありますが、持ち前の明るさと体力でこの病院に少しでも貢献できるように頑張ろうと思いますのでよろしくお願いします。

泌尿器科

医員 松ヶ角 透（平成19年卒）

出身は鹿児島ですが、鹿児島のなかでも珍しい名前です。これまで泌尿器科ならびに透析医療に従事してまいりました。一時も早く名前を覚えていただき、南丹医療圏の地域医療に貢献できますよう日々精進いたしますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

産婦人科

医員 明石 京子（平成19年卒）

平成19年、京都府立医科大学を卒業し、初期研修は京都第一赤十字病院、その後松下記念病院を経て京都府立医科大学大学院在学中です。本年度1年間は大学院生をしながら当院で診療をすることになります。よろしくお願いいたします。

小 児 科

医長 森田 高史（平成16年卒）

昨年度までは舞鶴こども療育センターで、主に発達障害の診療に携わっておりました。これからは地域の小児科診療に貢献できるよう精進して参ります。よろしくお願いします。

耳鼻咽喉科

医員 木下 翔太（平成26年卒）

前期専攻医の身分であり、ご迷惑をおかけすることも多々あると思いますが、今後も日々努力、精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

眼　　科

医員 大槻 陽平（平成23年卒）

大阪出身で京都府立医科大学を卒業し現在京都府立医科大学眼科学教室に所属しております。昨年度まで3年間京都府立医科大学附属北部医療センター（旧：府立与謝の海病院）で勤務しておりました。南丹医療圏の眼科診療に貢献できるよう笑顔を忘れず全力で努めてまいります。どうぞよろしくお願い致します。

第1回 南丹カップを開催して

救急看護認定看護師　前田（まえだ） 絵理子（えりこ）

私たち看護師に必要とされる援助は、所属する部署や対応する疾患によって異なります。多種多様な看護ケアに対応する必要がありますが、講義を受けたり参考書を読んだだけではイメージしにくいことも多くあります。さらに、看護は一人で行うものではなく、チームで協力してこそ継続した、患者さんに寄り添った援助が可能になります。

そこで、様々な看護場面における課題を設定し、部署毎の看護チームがその課題を攻略していく競技会「第1回南丹カップ」を平成28年11月19日（土）に開催しました。各課題では各所属長や認定看護師などが指導にあたり、参加メンバーと共に看護について考える時間となり、看護における課題を見出すことができました。参加メンバーからは、チームメンバーへの感謝やお互いを尊重する気持ち、またチームで協力することの大切さ、さらに先輩看護師を尊敬する気持ちなどの感想が多数聞かれました。企画に賛同していただいた医師や看護学生の協力もあり、85名の参加者が交流する活気ある時間ともなりました。

今後も、楽しみながら実践に活かせる、チームワークを向上できる研修会を企画し、よりよい看護の提供を目指して取り組んでいきたいと思います。

「第1回南丹カップ」に参加して

救急・放射線科看護師　松本（まつもと） 澄子（すみこ）

南丹カップは各部署でチームを作り、様々な看護分野ごとに状況を設定した問題が出題され、実際にその場で考え、行動し解答していくものでした。何が出題されるかわからない状況は働いている状況と同じで、とても緊張感のあるものでした。気持ちばかりが焦ってしまい、どのように対応すればいいのかわからなくなる場面もありました。そんな時助けになったのがチームのみんなの存在でした。

一人ではわからないこともそれぞれが得意としている分野で助け合ったり、違うアプローチの方法を提案してくれたり、チーム一丸となって問題に取り組むことができました。一人で行う看護には限界があり、色々な知識や考え方を持ったみんなが集まったからこそやり遂げることができたと思います。これは働く現場でも同じことが言えます。南丹カップを通して、チームで医療を行うことの大切さやそのチームの一員として働くうえでもっと勉強して看護の質を向上させなければならないと改めて気づくことができました。楽しみながら学べたこと、終了したときの達成感は今でも覚えています。また、機会があればぜひ参加したいと思います。

第１回南丹カップに患者役ボランティアとして参加して

公立南丹看護専門学校　２年生　M.N.

私は南丹カップでボランティアとして参加し、救命救急時の対応の見学と延命処置を受ける患者の家族役という体験をさせていただきました。看護師さん方は緊急時、患者さんの処置に集中するだけでなく、不安をいだく家族への言葉かけや背中を支えられての誘導という配慮がありました。この心遣いが安心感へと繋がったことで看護の強みを感じることができました。また一つひとつの処置には根拠があり、なぜこの行動を行うのかということを、見て聞いて学ぶことができました。さらに一刻をあらそう場面で即座に役割分担、延命処置が開始されチームで協力し連携体制をとることの大切さも学ぶことができました。学校の授業では経験することができないほどの貴重な体験でした。この体験を学生同士で共有し、これからの学習に活かしていきたいです。

公立南丹看護専門学校　２年生　Y.S.

接遇体験を通して、患者さんに納得してもらうにはどうするかをチームで話し合い、意見を一つにまとめ、対処行動をとるということがいかに難しいかを学ぶことができました。チームの中でも一人ひとり考えていることは様々であり、一つに意見をまとめる際に誰が率先してまとめるか、どの意見を最優先させるか、など様々な問題があることがわかりました。その中で全ての看護師さんに共通していたことは、最後まで患者さんの話を聞いた上で、誰一人焦らず患者さんの横に寄り添い傾聴されていたところです。そこからどのようにすればよいかしっかりとチームで話し合い意見を一つにまとめ、対処行動を取られており、見習うところや参考になるところがとてもたくさんあり、参加して良かったと思いました。

接遇体験を通して学んだことなどを学生間や教員と情報の共有を行い、学びをより深め、今後の実習やこれからの看護師としての対処方法の1つとして参考にしていきたいと思います。

南丹カップに参加したチームと患者役ボランティアの看護学生

病理診断科

Department of Diagnostic Pathology

総長（病理診断科）　伏木 信次

病理診断とは何かを考えるとき、私はいつもアーサー・ヘイリーの小説「最後の診断 The Final Diagnosis」(1959年刊、新潮文庫所収)を想い起こす。この小説の中には、米国の地方病院の病理部長ピアスンと若手病理医コールマンの間で繰り広げられる膝の腫瘍に関する病理診断をめぐる葛藤が描かれている。

病理診断の基本は、生検や手術で採取・切除された組織・細胞を色素染色したうえで顕微鏡下に観察し、組織・細胞の形態変化を捉えることにある。病変が果たして炎症性なのか腫瘍性なのか、また腫瘍であれば種類（組織型）は何であり、どのような広がりを示すのかなど、病気の確定診断に結びつく情報を提供するのが病理診断である。今日では、医学の目覚ましい発展を反映し、各種抗体による免疫組織化学（免疫染色）や遺伝子解析を組み合わせることにより病変の正確な理解や詳細な診断が可能となった。

当科では平成28年12月より自動免疫染色装置を導入し、病理診断の精度向上、迅速化に役立てている。また近年コンパニオン診断と呼ばれる概念が広まり、分子標的薬治療に先立って、当該薬が患者に高い治療効果を示すのかどうかを分子レベルで診断する時代を迎えている。たとえば当科では抗HER2分子標的薬治療に活用していただくため乳癌の病理組織標本にHER2タンパク質の免疫染色を行い、その発現を評価報告している。その他の癌においても遺伝子変異や遺伝子発現の検索が可能になりつつあるので、今後も新規診断技術に関し、臨床各科からの要望に対応できるよう努めたい。

一方、病理解剖は、病院で実施される医療の質を担保するうえで外科病理診断と並び重要な役割を担っている。臨床研修プログラムの中でCPC（臨床病理検討会）報告が義務づけられているのはまさにそのことを物語る。このように病理解剖、外科病理診断が両々相俟って医療に貢献していることに鑑みて、それらを担う人材の育成こそが急務となっている。このたびの病理診断科標榜は若手病理医育成にも裨益すると考える。

最後に、平素より当科に絶大なるご支援とご懇篤なるご指導を賜っている京都府立医科大学大学院分子病態病理学 伊東恭子教授に深謝し、病理解剖や若手病理医育成をも含めて引き続きのご指導をお願い申し上げる次第です。

病理診断科における臨床検査技師の役割

臨床検査科主任　山村 京介

当科での臨床検査技師の主な業務には、細胞診断と組織診断のための標本作製があります。細胞診は、細胞検査士の資格を有する臨床検査技師が毎月約250件、年間約3,000件のスクリーニング（異型のある細胞とない細胞の仕分け作業を顕微鏡レベルで行うこと）を行っています。細胞の所見を記入した後、病理医が最終診断を行っています。

組織診断のための標本作成は体内から取り出した臓器の一部をホルマリンに浸して組織の固定を行うことからはじまります。固定後の組織は特殊な加工を加えてパラフィンブロック（ろうで固めた物）にします。そのパラフィンブロックを特殊な機器で薄く切り、スライドに貼り付けて、染色します。その染色された標本は病理医によって診断されます。病理医が常勤となったことで手術時に行う術中迅速組織診断が随時可能となり、外科系の手術がより適正に行われています。

病理診断科の発展に貢献するために、今後も病理医と連携し、後進の育成や日々の研鑽に努めますので皆さまのご協力をお願いします。

MRI装置の新規導入とリニューアル

放射線科医師　松浦（まつうら） 永明（ながあき）

画像診断は、体外からは観察できない体内の状態を画像化し、診断を行うものです。明治28年にヴィルヘルム・レントゲンによりX線が発見されたことで始まったこの分野ですが、現在では核医学検査、超音波検査、CT検査、MRI検査など多岐にわたる検査が存在します。中でもCT検査やMRI検査の技術の進歩は著しく、現在の医療において必要不可欠なものとなっています。

今回、当院のMRI検査が新しく生まれ変わります。平成29年2月に3.0T（テスラ）MRIが新たに導入され、3月末には1.5T MRIも更新されました。画質が向上するだけではなく、撮影できる領域や臓器も増え、より緻密で精細な撮影も可能になります。よりよい画像診断を皆様に提供できるよう、診療放射線技師と力を合わせ努力してまいりますので、宜しくお願いいたします。

※テスラとは磁場強度を表す単位でこの値が大きいほど強い信号が得られることになります。

診療放射線技師主任　中澤（なかざわ） 修（おさむ）

放射線科では、平成13年より稼働してきた1.5T（テスラ）MRI装置をリニューアルすると共に新規の3.0T MRI装置を導入する運びとなりました。これにより、最新型の1.5Tと3.0TのMRI装置2台となりMRIシステムとして稼働します。患者さんの検査を今まで以上に充実させ、予約検査はもちろん緊急検査にも迅速に対応できるようになります。今後は3.0Tと1.5Tの装置の特性を活かし、しっかりと患者さんの検査をサポートしていくことができます。

具体的には頭や脊椎、乳腺等は動きが少なく専用のコイルがあることから3.0Tの装置を使用して今までより細かく鮮明な画像が得られます。また臓器に動きのある心臓や呼吸によって動く腹部には、1.5Tの装置を使用して今まで行えなかった心機能解析や息止めなしで肝臓や胆管等の画像が得られます。さらに、腫瘍検索に有用な最新技術のBody-Diffusionは1.5T、3.0Tどちらの装置でも撮像が可能になり、検査の幅が広がります。

生まれ変わったMRI検査を地域住民のみなさまよろしくお願いします。今回、新しいMRI検査に携わる担当技師として、患者さんに優しく、質の高い医療情報の提供を行えるように日々研鑽しますのでよろしくお願いします。

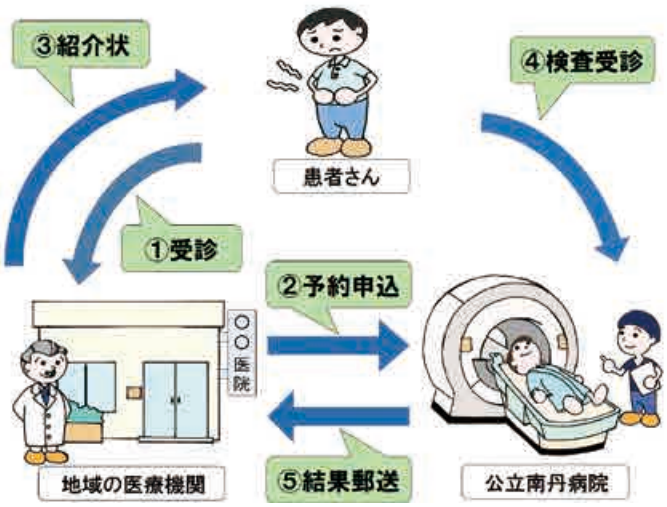
施設共同利用について

施設共同利用とは、病院の施設や機能を地域の医療機関の先生方に開放し、共同で利用することです。当院では現在、CT検査やMRI検査、RI検査、そして内視鏡検査をご利用いただいております。

検査予約は「地域医療連携室」が窓口となります。先生方からお申し込みいただきましたら、予約をお取りし「検査日のお知らせ」をFAX送信いたします。

共同利用によって皆様により良い医療を提供するとともに、地域医療連携のさらなる強化を目指しています。

※検査予約については、患者さんからの直接のご予約は承っておりません



【お問い合わせ】公立南丹病院「地域医療連携室」 電話：0771-42-5061 ／ FAX：0771-42-5071

近隣の連携医療機関の先生方

『予定していなかった開業医になって』

平岡医院
院長 平岡（ひらおか） 聡（さとし）

昭和3年に、わたしの祖父が開設した診療所を昭和33年に父が継承し、平成18年にわたしが継承しました。平成17年当時、すでに後期高齢者となっていた父を心配した医局の上司であった当時の助教授が「お父さんの診療所を継承し、1年後に閉院して勤務医に戻るように」とのいわば医局人事で診療所を継承しました。

開業したとたんに、平田クリニックの平田正弘（ひらたまさひろ）先生に在宅医療の世界に引き入れられてしまいました。結局、勤務医には戻れなくなって…平成19年に老朽化した診療所を改築し、なんとか試行錯誤しながら現在に至っています。

普段の外来をしながら在宅医療も始めましたが…初心者だったので、在宅医療のパイオニアの平田先生、訪問看護の看護師さん達に頭を下げて教えを請って習い、南丹病院からもたくさんの患者さんをご紹介いただけるようになりました。

わたしは、医師免許を取得してから開業するまでの間、亀岡、南丹地域で働いた経験が無く、病院を含めて地域の先生方を誰ひとりといってよいほど存じ上げなかったため、病診連携について心配しましたが…南丹病院は、いち早く地域連携室を開設されて、病状が悪化された患者さんを受け入れていただき、地域の患者さんはもちろん、わたしも大変助かっています。

平成19年に改築した診療所は、北欧規格の木造の建物で、暑さ、寒さを感じない構造で、いつ患者さんが来院されたとしても、快適に受診いただけます。また、土足での受診、バリアフリーにして、車椅子に乗ったまま対応できるようにしています。

これからも、病気を抱えながらも住み慣れた自宅で過ごしたいと希望される患者さんのお役に立てるように頑張っていきたいと思います。それには、受け入れていただける南丹病院の先生方は大変でしょうが、引き続きバックアップをお願いできればと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

『地域に密着した医療と連携』

河野歯科医院
院長 河野（こうの） 弘之（ひろゆき）

平成5年に国道9号線沿いの父の診療所に勤務し平成6年に引き継ぎ、その2年後の平成8年に並河駅前のマンションの1階に移転させていただきました。

その頃にはこの地域にある会社や学校に勤めておられるたくさんの外国人の方々が住んでおられ、その中で歯科医療が必要な方々が来院された時には、言葉が通じず、絵を描いたり、身ぶり手ぶりで苦労して説明したことがありました。この周辺もここ十数年でかなり整備され変わってきました。その中で歯科医療も新しい技術や材料が増え受診される方も多くの情報をもって来られるので、日々慎重な対応をしながら診察しています。

公立南丹病院の先生方、スタッフの方々にはいつもお世話になっており、難症例も心良く処置していただき大変心強く思っております。何卒今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

看護師として1年を終えて

第二病棟2階西病棟　谷掛（たにかけ） 志穂（しほ）

1年前、国家試験の合格通知を受けて看護師として働けることになりました。緊張や不安がある反面、楽しみという気持ちを抱いていたことを覚えています。学生の頃は患者さんと一対一の関わりができたため、十分に時間をかけて看護を提供することができていました。しかし看護師として働くと、ADL（日常生活動作）や疾患が異なる患者さんを何人も把握し、看護を提供していかなければならない上、初めの頃は物品の場所一つにしても全く分からない状態であったため、慣れるまでは本当に毎日が大変でした。

それでも毎日頑張ってこられたのは、患者さんの「ありがとう」という言葉や、回復して元気な状態で退院されていく姿を見ることができたからです。疾患の重症度に関わらず、それまでの環境とは異なる入院という生活に不安や苦しみ、ストレスを抱えておられる方は少なくないはずです。その患者さんを一番近くで支えられるのは看護師である私たちだと思います。これからもその気持ちを忘れずに患者さんと関わっていきたいです。

そして、今年度からは2年目になり新しく後輩が入ってくることになります。1年前の私と同じように複雑な思いを抱きながらのスタートを切る後輩も少なくないはずです。先輩たちのように後輩たちのお手本になれるような存在になりたいです。

平成28年度「第3回 緩和ケア講演会」

緩和ケアチーム・がん相談支援センター　緩和ケア認定看護師　碓井（うすい） 寛子（ひろこ）

当院は、地域がん診療病院として京都府南丹保健所と共催し、より多くの地域住民の皆様に緩和ケアについて考えていただきたいとの思いから、地域住民と保健・医療・福祉従事者を対象に毎年緩和ケア講演会を開催しています。今年度は2月25日「ガレリアかめおか」にて、がん患者さんのメンタルケアを専門とするサイコオンコロジーの第一人者である、聖路加国際病院精神腫瘍科の保坂（ほさか） 隆（たかし）先生をお迎えし、「自分らしい最期を迎えるためにはどう生きていけばいいのか?」と題し、ご講演いただきました。

講演では、健康で長生きを目指すためにも身近にいてその人を助けてくれる存在（ソーシャルサポート）が重要であり、よりよい人間関係のなかで私たちが相互にソーシャルサポートを行うことが大切であるということ、また年代別の生き方についてお話しくださいました。また、「うつ病」や「認知症」に対する運動の効用や実践方法、最期の時に後悔しないためにこれからどう生きていけば良いか具体的に考えることができる内容でした。中でも一番心に残ったことは、長い経験の中でスピリチュアリティのある患者さんほど、穏やかな気持ちで死に向き合っておられるということでした。それは死生観や信仰心、死後の世界を信じているかなど、目に見えないことを受け止められる感受性のようなものでしょうか。今はたとえ持っていなくても、こだわりや頑なな考え方を捨て、最期は心穏やかに迎えたいものです。今後もこのような講演会を企画し、皆様と一緒に緩和ケアについて考えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

看護師・助産師募集（正職員・臨時職員）

正職員・臨時職員共に院内保育所の利用ができます。
看護師寮（正職員のみ）の利用も可能です。（月額10,480円）

〒629-0197
京都府南丹市八木町八木上野25番地
公立南丹病院 総務課人事係
TEL 0771-42-2510（代）まで
詳しくは公立南丹病院ホームページをご覧下さい。
http://www.nantanhosp.or.jp

南丹病院「門柱」物語

皆さんもご存知のように、公立南丹病院の正面玄関の駐車場入り口には「南丹病院」と書いた銅板の標札が埋め込まれた門柱があります。この門柱は病院の設立にあたり八木山から掘り出された花崗岩で作られています。銅板の「南丹病院」の文字は設立当時の京都府立医科大学の学長、旧園部藩の出身で、郷里の医療に高い関心を抱いておられた浅山忠愛（あさやまちゅうあい）氏の直筆によるものです。昭和11年4月の病院開設時の病床は30床。現在の464床へと南丹病院が発展していく中、静かに病院の姿を見続けてきた京都府下の公立病院で一番歴史のある門柱です。平成29年の5月に病院名は変わりますが、長年愛されてきた門柱は記念碑として存続します。

南丹地域の災害医療体制の強化

経営管理室主査・DMAT隊員　中井（なかい） 優志（まさし）

南丹医療圏における災害医療体制と連携の強化のため、南丹地域災害医療連絡会が設置され、南丹保健所と当院の主催で京都府、2市1町の担当者、医師会、薬剤師会、消防や地域の医療機関の方々とともに災害時の情報共有について第1回目の研修と意見交換が平成29年3月11日に当院にて行われました。京都府には「よろずネット」という情報共有ツールが整備されています。このようなツールを活用した災害時の情報の入力と共有、また各機関が持つ情報の効果的な共有などの連携強化が行えるよう当院も関係機関の方々と協力し、今後も取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。

編集後記

4月は新しい出発や出会いの季節をイメージします。本稿にもありますが当院は5月に病院名称を「京都中部総合医療センター」へ変更します。これまで通り地域の皆さまに親しまれる病院として、また地域医療の拠点として、その役割を果たしていきます。

地域の皆さまや、春からこの地域での生活を始められた方にも広く当院の情報をお伝えするために、よりよい広報誌を発行していきます。どうぞよろしくお願いします。

広報委員 M.N.

お詫びと訂正

広報誌第32巻（2017年1月新春号）の「第2回健康フォーラムの記事（p5）」の中で、実行委員会副委員長・循環器内科部長 野村哲矢のところ、野村哲也となっていました。お詫びして訂正します。

発行：公立南丹病院広報委員会